

□書 評□

「肝 障 害」

—アルコール・薬物障害例とその病像—

〔著〕伊 藤 進（千葉大学講師）

千葉大学教授

岡 林 篤

アルコール性肝障害と薬物性肝障害について、臨床から基礎へ基礎から臨床への橋渡しの作業が遂行された。——これが本書をひもどいた第一印象である。

伊藤 進博士は共同研究者とともに生検を活用しての探求をつづけてきたが、臨床と基礎とが一体となった病理として、それを本書に結実した。この書は、また深く広く扉を開いて、両疾患を中心に肝臓病への周到な入門の書へと配慮されている。

この本はつぎのように構成される。

肝疾患の診断一般についての第Ⅰ部。アルコール性肝障害——いとぐちとしての症例、アルコール性脂肪肝、アルコール性肝炎、アルコール性肝硬変、アルコール代謝と肝、アルコール硝子体について、まとめの第Ⅱ部。薬物性肝障害——いとぐち、肝障害の頻度、病型、症例、薬物性肝障害の病像、診断、治療、予防、

薬物代謝と個体差・環境、薬物代謝とミクロゾーム、薬物による肝微細構造の変化、——まとめの第Ⅲ部。

第Ⅳ部ではA. 慢性肝炎と類縁疾患、B. 原発性胆汁性肝硬変を主として、鑑別に蘊蓄を傾ける。かくして著者は、肝細胞の形の歪みと機能のずれとは盾の両面であるとの境地に達する。最近とみに発展しつつあるウイルス肝炎の診療に、著者はまた大きな期待をかける。そしてこの疾患が結核症のように主要疾病の圏外に去ることを望む。しかし、薬物とアルコールとは薬であると共に一種の毒である。したがって、この方が最後まで残るという可能性が指摘されている。

うへの目次からもわかるように、本書はまず一般的な肝疾患における理学的な所見を臨床病理学的に解説する。とくにアルコール・薬物性肝障害の診断にあたっては、これらの所見の大事なことを指摘する。そして

それぞれについて自験例をあげる。臨床像と病変とそれらの推移とを如実に捕捉できるように図表（45葉）と組織像並びに電顕像（226図）を掲示する。それはまた鑑別疾患その他に及ぶ。こうして、この探求の書は懇切な入門の書を形づくっている。

数多い優れた先達の研究と著書の中にあって、病理学域では例えば長与先生と三田村先生との肝硬変の分類に於ける師弟の情をこえての真摯な討論につづく流行性肝炎、その転帰としての肝硬変（山本、天野1960）、肝臓の病理、肝硬変を中心として（三宅1960）、わが国の肝癌とくに肝硬変との関係について（宮地1965）、Ultrastructural aspects of the liver and its disorders（谷川1968）、オーストラリア抗原と肝炎、肝癌の発生の機転（志方1974）などがある。それに本書を加えて、時代の系譜は進展する。力強いことである。

本書は三輪名誉教授、奥田教授を中核とする千葉大第一内科の実力の所産にほかならない。病理の故滝沢延次郎名誉教授も直接の援助を惜しまれなかったと聞く。本書の上梓をみて斯界へのたゆまぬ貢献に諸先生も満足のことと察せられる。
B5, 頁304, 図94, 写真129, 原色図5, ￥9,600, ㊦280
医学書院刊 1975